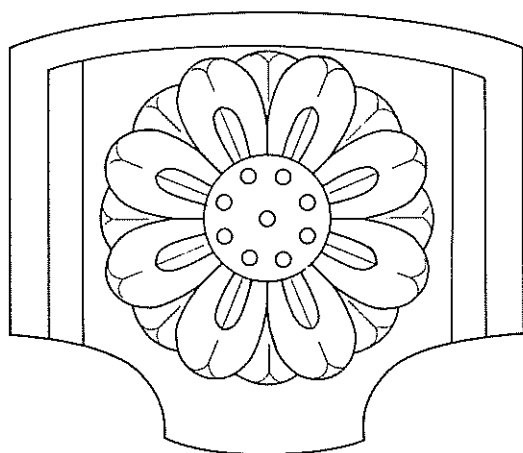


山田寺塔・中門・回廊跡  
大官大寺回廊跡  
発掘調査現地説明会資料



昭和 51 年 8 月 21 日

奈良国立文化財研究所  
飛鳥藤原宮跡発掘調査部

## 山田寺塔・中門・回廊跡の調査

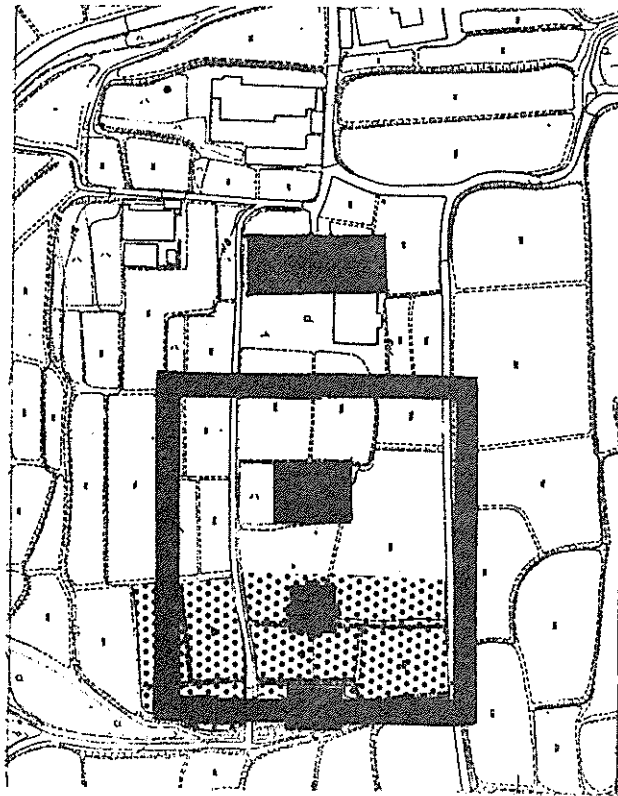
史跡山田寺跡の主要伽藍の復原とその後の変遷を明らかにするため、奈良国立文化財研究所では、今年度以降3箇年にわたって、山田寺の塔・金堂・講堂地区の発掘調査を予定しており、今回はその初年度の調査である。

今回の調査地区は、残存する塔の土壇を中心として、中門・東西回廊推定地を含む約2600㎡の発掘区を設定した。調査の結果、塔の規模を確定でき、中門・参道などの遺構を検出することができた。なお、塔及び伽藍の主軸は、真北に対し北で約20°西に傾いている。

### I 遺構の概要

#### (1) 塔

塔の平面は方形で、基壇化粧部を含めて一辺約42尺で、四辺の中央部に階段がつ



山田寺伽藍配置

いている。基壇は版築技法によって作られており、階段部分も基壇土を削り出している。

礎石は現在2個残存している。心礎位置に存在する礎石は東南隅に根石があることから、当初のものである可能性が強い。四天柱礎は、西北隅が当初のまま残っており、径1mの円柱座を作り出している。側柱の礎石は全く残っていないが、西側及び北側に根石の一部が認められる。柱間は7尺

石

等間と考えられる。基壇高は旧地表の敷き面から現在の礎石上面まで約2mの高さとなる。化粧石は、花崗岩の地覆石が残っており、羽目石・葛石は残っていない。地覆石には、羽目石をはさむ凹みを作り出したものがある。発掘中に、多くの凝灰岩切石が出土したが、その中に縁に小さな段をつけ化粧した石がみられ、羽目石・葛石は凝灰岩であったと考えられる。

階段部分は、幅10尺で、5尺の突出部分をもっている。

基壇周辺の施設として、犬走りがある。犬走りの石は、雲母を含む砂岩系の石で、縁石は幅25cm、長さ30～60cmの大きさで、塔東側でよく残存していた。内方敷石は、全体にまばらに残っており、縁石に比べると小さい。犬走りの縁は、階段の突出部分と同一線上に並べており、化粧石築造時、即ち当初の仕事と考えられる。犬走りは、階段部分で、幅17尺、出4尺に突出している。犬走り突出部分の石は、10cm程度の小さい石（雲母を含む砂岩系の石）を使用し、西側では埴、南側では花崗岩に一部変えている。

#### (2) 参道・瓦敷き

中門から塔にかけては、幅約5尺の参道を作っている。両側に花崗岩を並べ、内側には瓦を敷いている。

塔周辺では、瓦敷きを検出した。瓦敷きの中には鷗尾・単弁重弁軒丸瓦・重弧文軒平瓦を混えていた。

#### (3) 中門

中門地区では掘立柱穴を検出した。桁行4間で、梁行1間分を検出した。西端及び西2番目の柱穴は、中門基壇土とみられる版築土（約15cm厚）下で掘出しており、桁行が不揃いであること、柱穴の大きさに比べて柱間が広いこと、伽藍中軸線に中心の柱穴がのっていること、こうした事実から、検出した掘立柱穴は中門建設のための足場穴ではないかと考えられる。現在基壇土の大部分と礎石はすべて失なわれているが、足場穴から復原すれば、中門は3間×2間の礎石建物で、桁行柱間約14尺、梁行約13尺であったと考えられる。

#### (4) 推定回廊跡

塔の西側を走る道路の西では、塔周辺に比べて一段低くなっており、後世の水田

造成と耕作によって削り取られている。推定両面回廊地区では、塔中心より約 126 尺西で 2 個、約 140 尺西で 2 個の礎石落とし込み穴を検出したが、南側に続かず明らかでない。この位置を伽藍中軸線によって折りかえすと、現在の市道下および道路東にあたる。これに隣接する調査地区東端では瓦敷き上のバラス面から、多数の完形丸・平瓦が出土している。

#### (5) 整地土

塔・中門・回廊を含む今回の調査地区は、西に向ってゆるやかに傾斜する地盤上に位置している。そのため、塔位置を含む調査地区西半部では、厚さ約 40～50cm に及ぶ整地を行っており、塔・西面回廊はこの整地土上に造営されている。整地土からは、塔周辺から出土したものと同型式の軒瓦・檼先瓦が出土しており、塔・中門・回廊の造営が、金堂造営にやや遅れて始められた可能性を示しているが、結論は、来年度以降に予定されている金堂の調査結果にまちたい。

## II 遺物

### (1) 瓦・埴類

軒丸瓦では単弁重弁 8 葉蓮華文の「山田寺式」が大部分で、他に複弁軒丸瓦（外縁に重圏をめぐらす）1 点と、奈良時代の重圏文（6012 型式）1 点が出土した。「山田寺式」軒丸瓦は 5 種類に分れ、大型（蓮子 1 + 6）、中型（蓮子 1 + 6、1 + 5）、小型（蓮子 1 + 5(?)、1 + 4）のものがある。整理途中だが、出土瓦約 1/2 でみると、大型約 2 割、中型約 7 割強で、小型のものは少ない。軒平瓦は、四重弧文軒平瓦が 9 割以上を占め、三重弧文がわずかに認められる。また、奈良末の均整唐草文（中心飾り逆転）が 1 点出土した。

檼先瓦は、単弁重弁 8 葉蓮華文が 2 種類出土した。鷗尾は、頭部片から考えて、2 個体分出土した。腹部片には、重弁の羽形文様を重ねている。鬼板は単弁重弁蓮華文 2 種、奈良時代の鬼面文 2 種がある。蓮華文鬼板は両側にくり返みがあり（表紙カット参照）下り棟に使用したと考えられる。埴仏は 5 種類出土し、12 尊連座埴仏が最も多く、その他 4 尊 2 種、小型独尊 1 種、そして大型独尊像 1 種が出土している。

## (2) 金属製品

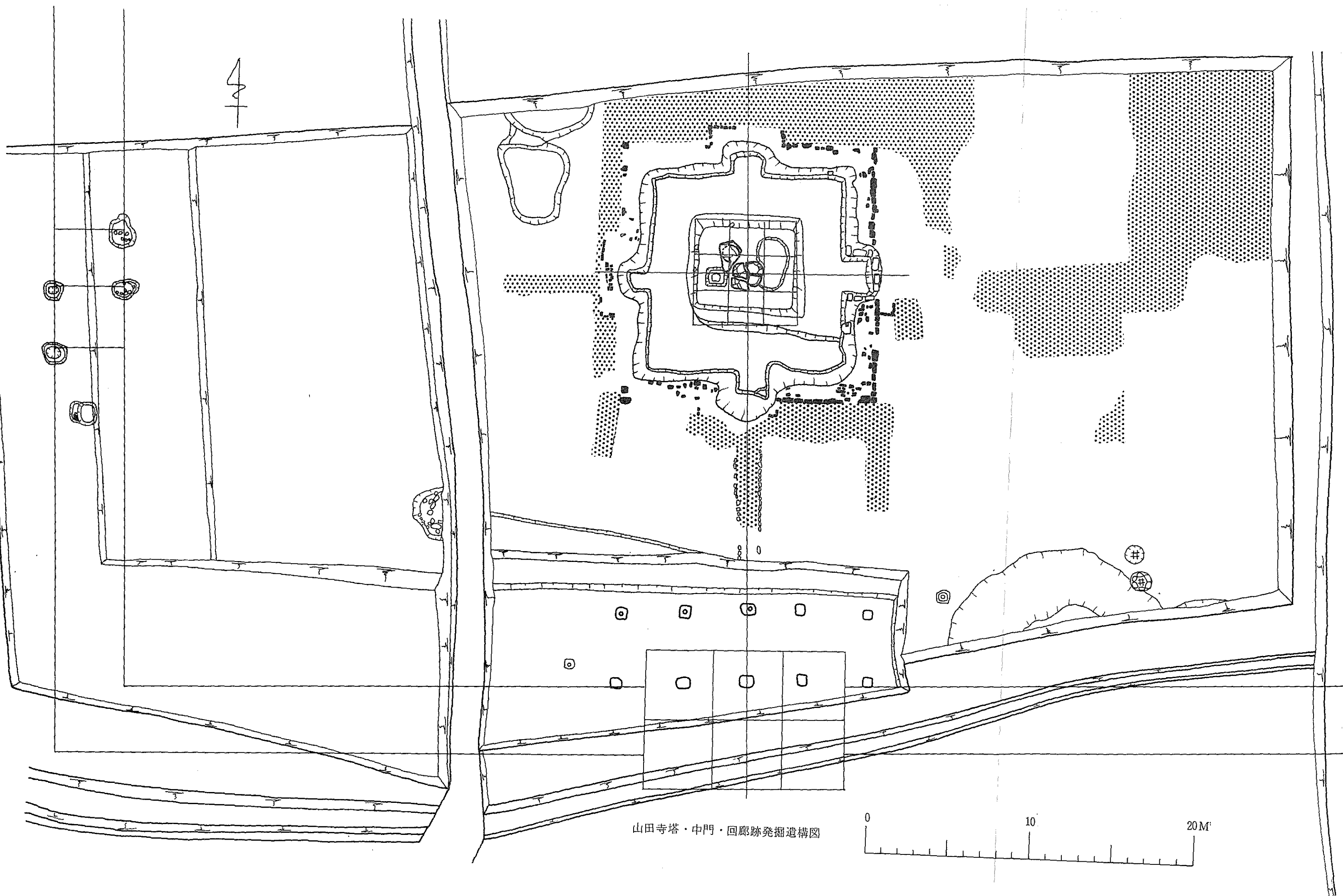
風招・金属製飾金具・鉄製茅負隅金具・鉄釘などが出土した。風招は、金銅製扇形のうすい板で、両側の先端部が上にはねあがる通有の型式とは異なる。

## (3) 木器・土器

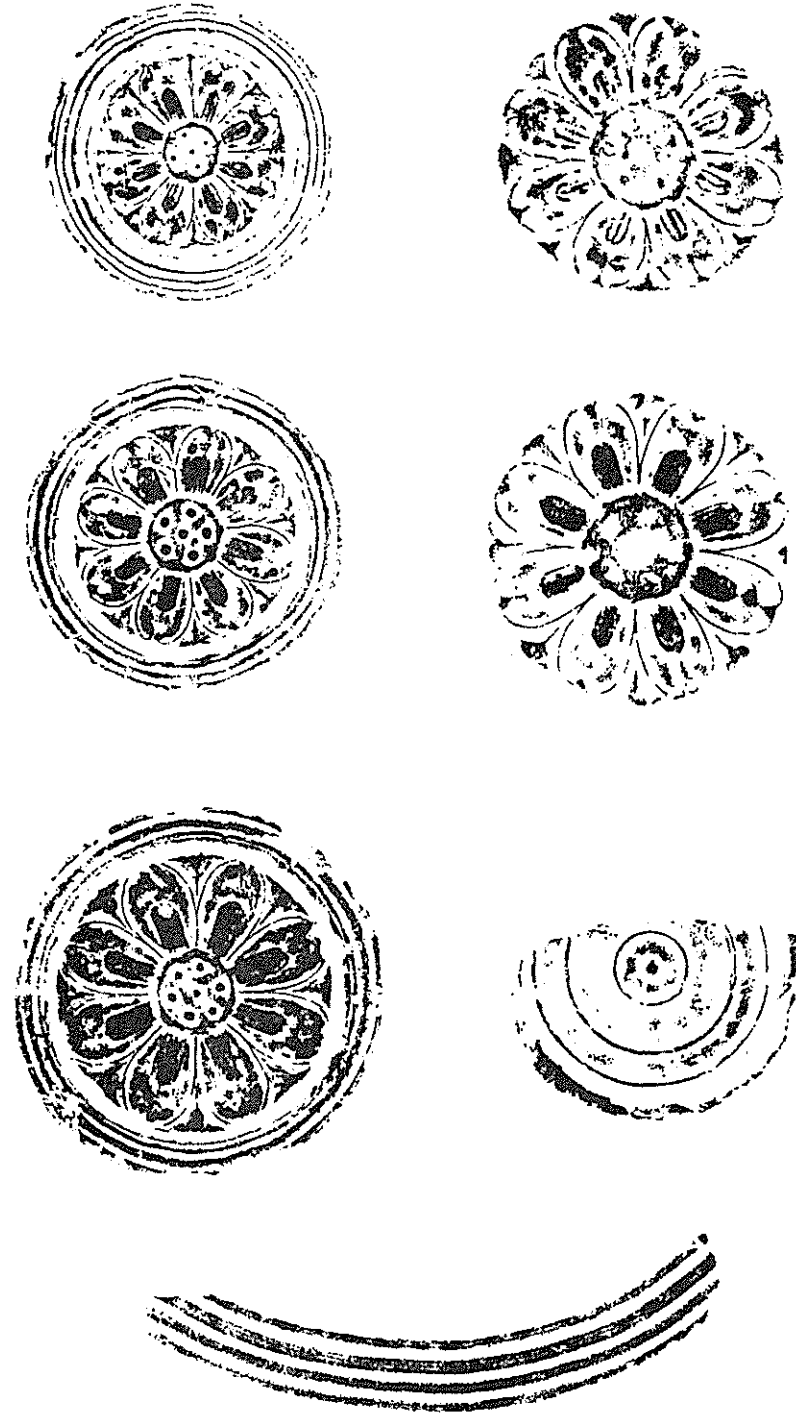
榿・瓦座をもつ茅負など、多くの建築部材が出土している。土器は、瓦敷き面の直上で奈良末の土師器・須恵器片が出土し、瓦敷上面のバラヅス層から瓦器が出土した。

### 山田寺略年表

- 641(舒明13) 平地を始める。
- 643(皇極2) 金堂を建てる。
- 648(大化4) 初めて僧が住む。
- 649(大化5) 蘇我倉山田石川麻呂害にあう。
- 663(天智2) 塔を構える。
- 673(天武2) 塔の心柱を立てる。
- 676(天武5) 露盤を上げる。
- 699(文武3) 封戸300戸を施入。
- 703(大宝3) 文武天皇、四大寺及び四天王、山田寺等に齋を設ける。
- 1023(治安3) 藤原道長、山田に立ちより堂塔を見る。
- 鎌倉時代 多武峯の末寺となる。
- 室町時代 興福寺の末寺となる。



山田寺塔・中門・回廊跡発掘遺構図



山田寺出土の遺物

## 大官大寺第3次発掘調査

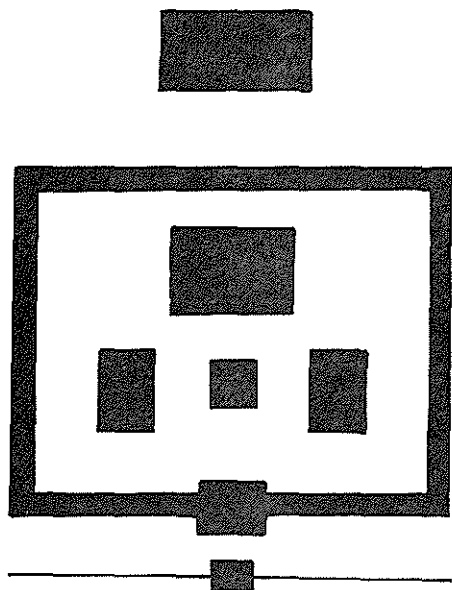
第1次調査では講堂の基壇規模を確認し北面回廊の一部を検出した。第2次では中門及び南面回廊の一部の柱位置を確認し、これにより伽藍の南北の規模が明らかとなっている。今回の調査は、回廊の東南隅を求めて伽藍の東西の規模を確定すると共に、調査区域を東へ拡張して寺域の範囲を、さらに藤原京の条坊との関係を明らかにすることを目的とした。

検出した主な遺構は、回廊礎石など大官大寺に関連するものと、藤原京の条坊、あるいはさらにさかのぼって中つ道に関係すると考えられるものとに大別されるが、後者については現在なお調査を進めつつあり、ここでは大官大寺回廊の遺構についてとりあえず報告する。

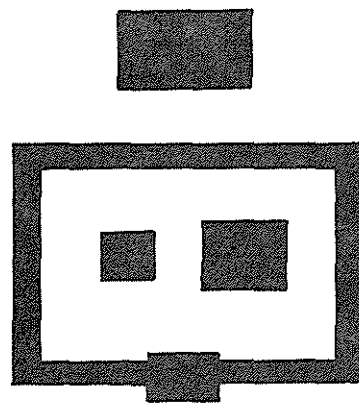
調査区域は、第2次で発掘した中門の真東にあたり、北に塔跡の土壇を望む。すでに一部確認している南面回廊の東部の礎石がまず検出された。礎石は、発掘区の西端から6間分は3.9 m (13尺) 等間の位置にあり、7間目に至ってややその間隔を広めた。この値が既知の梁間<sup>梁</sup>寸法 (14尺) と等しいことを知り、さらに以東に礎石の検出を見ないことを確認して、そこから北3.9 m (13尺) の位置に一对の礎石を得た。その間隔は4.2 m (14尺) であり、これを梁間として回廊が北へ折れることが判明したので、発掘区をさらに一部北へ拡張し、東面回廊を南から5間分<sup>5</sup>検出した。伽藍の中軸線からこの東面回廊の外側柱心まで約71.8mである。すでに得ている伽藍の南北規模の数値から、東面回廊は桁行が13尺等間ではほぼ21間の柱割になると考えられるが、多少の誤差を含み、中央に門を開く可能性も考えられる。南面回廊は中門から東へ15間と確定され、これにより大官大寺回廊の東西総長は約144 m (480尺)、南北総長は83 m (276尺) となることが明らかとなった。

礎石は、火災を受けたものと思われ原形をとどめず、大きさも一定しない。伽藍創建寺の旧地表は、瓦片を非常に多く含んだ焼土層でおおわれ、これをとりのぞくと回廊の基壇様の高まりが見られたが、その範囲は一定しておらず、基壇の地業として完成したものとはやはり言い難い。

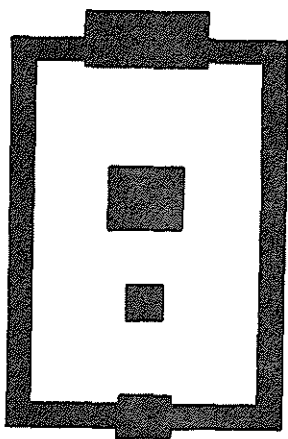




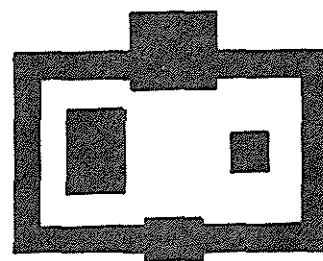
飛鳥寺



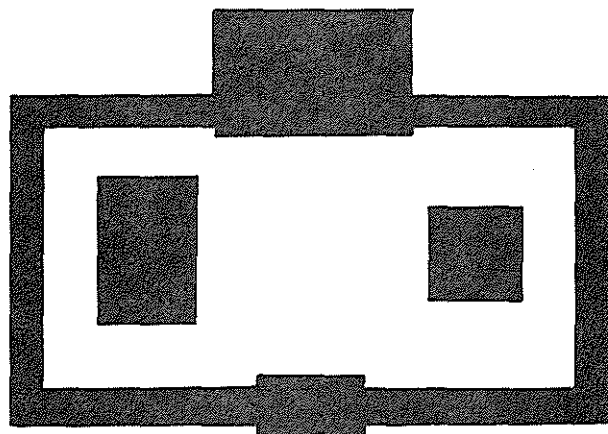
法隆寺



四天王寺



川原寺



大官大寺

古代寺院の伽藍規模比較

